

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370301057		
法人名	有限会社のどか宅老所		
事業所名	グループホームのどか I		
所在地	岡山県津山市下高倉西544-1		
自己評価作成日	令和4年6月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaisokosaku.shfw.go.jp/33/index.php?action=kouhyou_detail_022_hani=trun&jiyosyoCd=3370301057-00&ServiceCd=330&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和4年7月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

今年度は『介護のプロとしての意識を持ち、利用者がその人らしく生活できるように支える』を事業所目標とし、引き続き“アンガーマネジメント”等について学ぶ機会を作り、職員各自が自分自身の心の在り方を考えながら、そのコントロール方法を身につけ、適切な対応ができるようにと取り組んでいる。看板犬の13歳になるフレンチブルドッグは、昨年8月に相棒を亡くしたこともあってか、毛色が薄くなり足元もボロボロとして初老の雰囲気が強くなってきている。旅立った相棒の後に迎えた2匹は腕白すぎるようで手に余っている様子だが、それでも日々仲よく過ごしており、利用者と職員の大きな心の癒しになっている。4月には海外からの技能実習生を迎え、又、6月からは建物の外壁補修も行って、現状維持を目標とするリニューアルオープンに向けての準備を進めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者と職員はその人らしく生活できることを支える「のどか」開業以来の介護理念を理解し、利用者本位の介護サービスを提供している。また、介護技術の向上だけでなく“アンガーマネジメント”等心のありようについて学び、利用者が精神的に不安定な時などに多角的な視点から平常心で支援出来るよう研鑽している。職員と海外実習生(4月から勤務)はやりがいを感じて生き生き働いている。老犬ではあるが、施設内を巡回しているフレンチブルドッグは、さながら皆の安全を確認しているようにも見え、利用者や職員に癒しを提供している

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所当初から、『家庭生活の延長線上の介護の実践』を理念として取り組んでおり、又、法人全体としての理念・基本方針も掲げ、職員全員が共有できるようにしている。	「のどか」の介護理念は三つの理念と基本方針にまとめられ、玄関に掲示されている。中でも「利用者の心の拠り所となるための、質の高い誠実な介護」をスローガンに日々協働している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	特別なイベントの実施はないが、地区の子供会や小学生の慰問(感染症対策にて保護者の来所のみ)や草刈り等の行事に参加する際に交流している。	地域交流行事等を特別に開催するのではなく、町内会に加入し、地域の一員として日常的に地域と交流をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	在宅の方からの退院後の介護についての相談や入居の問い合わせがあった時には、現在の介護状況の聞き取りを行い、必要時には担当ケアマネージャーに連絡し、入居までの在宅サービス利用等の調整に協力している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症対策にて基本的には運営推進会議の開催を見合わせている。現在は利用者等の近況報告書を送付している為、十分な意見交換等は行うことができていない。	新型コロナウイルス感染拡大防止の視点から運営推進会議の開催を見合わせている。近況報告として、「運営推進会議・近況報告書」・「身体的拘束廃止・防止委員会報告書」に記録して送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所担当者には、その都度の質問や相談に対し、人間味溢れる誠意ある対応で接してもらっており、信頼している。	行政とは率直に相談でき、行政から助言をもらえることは仕事のしやすさに繋がり、利用者家族にとっては住みやすさに繋がると言える	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	管理者がオンライン研修で学んだ内容を内部研修等で周知徹底している。面会制限にて閉鎖的になりやすい状況ではあるが、行動を抑制するような言葉かけをも含めて窮屈な雰囲気にならないように工夫している。	施設の入り口や居室のドアに鍵はなく、理念に基づき精神的肉体的に拘束しない生活環境を提供している。やむを得ず拘束が必要な場合は身体拘束指針により対応している。今後は言葉の拘束、スピーチロック等、研鑽を深めていく予定である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者がオンライン研修で学んだ内容を内部研修等で周知徹底している。現在の課題は、いわゆる虐待行為ではないが“食欲のない利用者にどこまでの食事摂取を求めるか”ということであり悩ましい日々となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	定期的に内部研修会を行っており、必要時には相談等に応じる体制にしている。現在、成年後見人制度を活用している利用者が1名いる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者が入居時に契約書や重要事項説明書の内容について説明している。その際、内容についての疑問や入居後の生活について不安なことがないか聞き取り、意向や要望の把握に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月、利用者の近況を書面で知らせつつ“入居生活での要望”についても尋ね、対応に活かすようにしている。	運営推進会議内容や利用者の近況報告を送付することで家族の要望等くみ上げている。例えば、便通について青汁が良いという提案があり、使ってみるととても良かったので続けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	1年に1回には“会社への要望”についての意見を提出する機会を作っている。今年度は、新しい福祉車両の購入や経年劣化による建物内の修理等に応じている。	基本的に年2回開催する法人のリーダー会議等で職員の意見や改善の要望を提出する機会を設けている。今回はその中から、新しい福祉車両購入や建物の修理などを行ってもらっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパス導入による個々の職員の能力評価を行い、資格や就業年数だけでなく就業態度や意欲等も加味し、職員各自のやる気を引き出せるような職場環境を目指し整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修への参加は推奨しているが、感染症対策として控えている。今後は状況に合わせて参加を勧めていきたい。内部研修では知識を増やししながら、課題に対して各職員の考えを意見交換できるような機会にしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	感染症対策にて外部研修会に参加できていなかったこともあり、外部同業者との交流もほとんどできていない。今後は感染状況に合わせて、可能な限り勧めていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族・ケアマネジャー・入居前に利用していたサービス事業者等からの情報をもとに、利用者の生活リズム・性格・行動パターン・こだわり等について把握しながら関係づくりをすすめている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	“家族の困りごと”と“本人の困りごと”は違う場合が多い。両者の要望を聴きながら、事業所として可能な対応を提示し実践している。利用者にとってより良い対応を一緒に考えることで信頼関係を深めるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時には家族とケアマネジャー・サービス事業所・医療関係者等の専門職からの情報収集も行い、生活全体を広い視野でとらえながらサービス内容を検討している。状況によっては他事業所を紹介するケースもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者は“できなくなる人”という現実を受け止めながらも“できること”を探る姿勢を持つように心がけている。人は特別な何かをしなくてもその存在自体が役割になることを意識しながら、同じ時間を過ごすようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	感染症対策にて、現在は制限付きの面会のみを行っている。利用者・家族とも混乱等はない。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本来ならば積極的に協力する体制にしているが、現在は感染症対策にて直接的な交流はできていない。今後、感染状況が治まれば支援していきたい。	コロナウイルス感染拡大防止から施設外の人と面会等交流はできていないが、感染状況が改善したら馴染みの場所や人との交流が途切れないように対応してゆく。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	各利用者にはそれぞれの“我が道”があり、関わり合いを好む場合ばかりではない。職員は利用者同士が必要な時に適切な触れ合いの時間を持つように仲立ちすることを心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設へ移る場合は当所での生活ぶりを情報提供している。場合によっては、退居後も家族の相談に応じる等の支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の発言や日常の様子から要望を察し、可能な限り対応していく体制にしている。各利用者の担当職員を決め、「気づきシート」に記入し、「認知症対応型共同生活介護計画書」の作成に活用している。	言葉にならない利用者の思いを介護に反映するため、職員は利用者の表情、仕草から思いや意向をくみ取り「気づきシート」に記録して職員が共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居までの経緯や入居前の生活ぶりについては、入居時の情報収集等で把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	「介護チェック表」に日々の利用者ごとの記録を行い、状態を把握するようにしている。「いつもと違う状態」がみられた時や日頃がない言動があった時にはこまめに記入するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	「認知症対応型共同生活介護計画書」は本人と家族の意向や各利用者の担当職員の気づきをもとに作成している。	「気づきシート」の様式は管理者が試行錯誤した独自のもので、利用者や家族の思いなどが表出しやすいようになっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	「介護チェック表」には利用者の体調や言動についての観察内容と介護計画を実践した時の状態(反応等)についても記録している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	感染症対策にて制限はあるものの、要望があれば協力して支援する体制にしている。型にはまらないサービスに挑戦したいと考えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	感染症対策にて外出の機会がほとんどない状態になっている。個別でドライブに出かけて、季節の花を見て楽しむ等の時間を作っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には協力医療機関の医師がかかりつけ医となる。1ヶ月に2回の定期的な訪問診療と随時の受診・往診にて対応している。緊急的な体調不良時には、迅速に他病院の紹介もしてもらえ、スムーズに対応ができています。	協力医療機関とは定期的な受診、随時受診、往診、緊急受診など迅速に医療サービスをうけることができる。また、他診療科への受診についてもホームで対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	1週間に1回の協力医療機関からの訪問看護にて、状態報告と日々の対応についての相談を行い、助言を受けている。看取り介護の際にも刻々と変化する状態の説明や細やかな指示があり、適切な対応につながっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には必ず付き添い、病院スタッフに基本的な情報と対応のポイントについて説明している。入院中には医療相談員に状態の変化について尋ね、退院後に必要となる対応について準備をしたり、退院時には退院後のフォローを依頼している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に「看取りの指針」について説明している。延命処置についても、この機会を利用して家族間での話し合いを依頼し「事前要望書」を提出してもらっている。体力やADLの低下等の状態の変化に合わせて、かかりつけ医と連携を図り対応している。	入居時に「看取りの指針」について説明し、身体的状況に低下がみられる場合は、かかりつけ医と連携するとともに職員間で情報共有して看取り介護をしている。また、重度化された際には、連携施設である法人系列の特養を希望する家族もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に内部研修を行い、情報を共有しながら実技の練習を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	1年に2回の避難訓練を行い、地域の消防団や民生委員の方にも非常時の応援を依頼している。感染症対策にて外部の方の立ち合い要請はできていないが、いつでも連絡できる体制になっている。	火災訓練は年2回開催している。また、災害に関しても町内会と連携がある。水害等に関しては、ホームが高台にあることもあって、町内の人たちに来てもらうよう準備している。水や非常食3日分を備蓄している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の性格と精神状態の把握に努め、場面に適した言葉かけをするように心がけている。状態観察を行い、次の行動を予測しながら対応するが察する力と豊富なボキャブラリーが必要とされる為、課題は多い。	“アンガーマネジメント”等を学び、平常心で介護に向き合うことで、職員の言動や態度等で利用者の混乱を誘発しないよう介護の質向上を目指している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	具体的な表現が難しい利用者が多く、思いを察しての対応が多くなる。日常生活上の対応の希望については、対応後の反応が快い表情であれば気持ちに沿った内容だったと判断している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な生活リズムが乱れてくると体調や精神面に影響が出る為、基本的な日課(食事や入浴等)については一定のスケジュールを作っている。余暇時間については、希望に沿った時間(快い表情)になるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1回、美容師による散髪を実施しているが、希望者にはカラーリングも行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	感染症対策や台所作業が難しくなったり、あまり好きではない利用者が多い為、衛生面も考慮し調理工程を一緒に行うことはしていない。	衛生面や感染対策として、栄養価計算された献立をもとに、職員が調理をして提供している。コロナ以前には、職員と一緒に簡単な調理をして楽しんでいただたこと。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	「介護チェック表」に食事摂取量を記入し、水分摂取量が少ない利用者は水分摂取量記録を記入する。血液検査での栄養状態と摂取量を考慮し、不足している場合は好物や栄養補助食品を個別購入して勧めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯みがき・イソジン液でのうがいや口腔清拭にて清潔保持に努めている。現在、義歯を使用している利用者は3名あり、毎回とも介助しながら口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	「排泄記録」により利用者の排泄パターンを把握しながら、トイレ誘導やオシメ等の交換を行っている。排泄の自立というよりは、トイレでの排泄で清潔を保ち、尿路感染症と皮膚トラブルを予防することを目的にしている。	利用者のプライバシーを尊重した介助が行われている。残尿が多い人もいるので、自分で下腹を押えてもらうなどして、じっくりと待つようにしている。記録は正確に記録されて健康把握がされている	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	緩下剤の服用だけでは排便がみられない利用者が多い。毎日のオリゴ糖・オリーブオイルの摂取と個別の乳酸菌食品の摂取をすすめた結果、便秘改善に繋がっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に2日に1回の入浴を実施しているが、希望時や必要時は随時対応も行う体制にしている。安全面を優先し、日中に入浴するようにしているが、順番については利用者の希望や状態により当日決定している。	基本的に週3回の入浴している。現在、入浴を嫌がって困る人はいないとのこと。職員間で利用者個々の特性を周知共有しているからこそだろう。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の体質に合った入眠剤等の処方にて日中に眠気が残らないように調整している。又、午前中の日光浴で体内リズムを整えたり、昼食後に短時間の昼寝をして休息することで、精神的にリラックスできるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	「個人ファイル」に内服薬の説明書を綴じて理解を深め、服薬時は介助し確実に飲み込めるまで確認している。臨時薬の処方や定期薬の変更があった時は状態観察をこまめに行うようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	若かりし頃に得意だったこと・興味・関心・嗜好等が変化している場合も少なくない。現状での本人の快いと感じることを探す努力をしているが、意思表示が難しくなっている利用者が多く工夫が必要になっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症対策により外出は控えている。本人からは具体的な希望が出にくい状況であり、気持ちを察しての企画作りとなる。何らかの要望があれば、実現に向けて支援していく体制にしている。	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、外出は控えている。感染状況が改善した場合には、外出を計画したいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、お金の所持を希望する利用者はおらず、個別に何かを購入する時は事業所が一時立て替えをしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	現在、電話についての要望はないが、家族から連絡があった時には、気が済むまで対話できるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木造の平屋建てであり、温かみのある雰囲気になっているが、年月の経過とともにかなり老朽化が目立つようになっている。時期の生花を生けることで季節感を演出し、利用者と一緒に作った作品を飾りつけ、温かみや面白味が感じられるようにしている。	生け花等で季節感を出し、利用者と一緒に作成した飾りを壁等に掲示している。バルコニーに目をやると、青々とした稲が気持ちよさそうに風にそよいでいる。津山市街を遠望することができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースはL字型にして無駄な動線と死角を少なくしている。感染症対策で利用者同士の適正な間隔を保ちながらも心地良く過ごすことができるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的に家具は持ち込みをしているが、ほとんどの利用者が物への執着や関心がなくなっている。又、感染症対策として消毒しやすい状態にしている為、やや色味の少ない殺風景な印象になってしまっている。	利用者の使い慣れた馴染みの家具等が持ち込まれているが、感染症防止対策として消毒や清掃が行いやすいよう清潔感を維持する工夫をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の行動パターン(動線)と“しっくりくる場所”に配慮しながらソファやテーブルの位置・向きを検討し、安全に行動できるようにしている。		